

ジムチャレンジ、辞退
します。

尺骨茎状突起

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハロンタウンでチャンピオン、ダンデからポケモンを貰った3人目のお話。

目次

ハロンタウン、帰ります。	1
きのみ、求めます。	8
ポケモンいるとか、アガります。	19
過去、振り返ります。	31
タマゴ、孵ります。	46
ジム戦、燃えます。	57

ハロンタウン、帰ります。

たまに夢を見る。

見るものは決まってあの時のこと。

「シキ！なんでだよ!!」

「シキ…本当にやめるの…?」

「ごめんホップ、ユウリ。俺はもう無理だ。」

幼馴染2人と切磋琢磨して、3人でチャンピオン目指して、でかいスタジアムで戦うって約束したのに、

俺は2人を裏切ってしまった。

理由も言えず、俺は黙って2人に背を向けて…

コンツ…コンツ…とリズムカルな衝撃をおでこに感じ、目が覚める。

—キキッ!

「ん。毎朝ありがとサルノリ。」

起こしてくれたサルノリの頭を撫で、軽く礼を言う。

朝は別に苦手じゃなかった。なんなら、毎朝自分で起きていたし、ホップやユウリが寝坊しそうな時、2人の親に、家にあがらせてもらって叩き起こしたこともある。

けど、あの時から妙に起きれなくなっていた。

「ハイ、ロトム」

その一言で机の上に置いてあったスマホロトムが目の前に飛んでくる。まだハツキリと目が見えているわけじゃないので、目を細くして日付と時間を確認する。

時間は朝の5時半。

一般的に見れば早い時間だが、ハロンタウンでは違う。畑はもちろん、ウールーの世話もしなければならぬ。もちろん、大事なことや子供には難しいことは大人がやる。俺がするのはあくまで手伝い。

昔はユウリもホップもいたから分担して仕事を分けていたからもう少し寝ることが出来たけど…

「…つてそうか。今日あいつらのジムチャレンジあるんだ。」

畑仕事に出る服装を整えて家の階段を降りながら思い出す。玄関で既に準備を終えている母が出迎える。

「シキ。おはよ。」

「おはよう。母さん。」

あのことについては、母は言及してこない。言い出せないでいる俺に気を使っているのは明白。微妙な空気になることもあるが、いまはそれがありがたかった。

「なあ、母さん今日」

「録画を頼むんじゃないやなくて、見に行ってきたら？ エンジンシティは電車使えばそこまで遠くないわよっ。」

「…いや、録画しといて。」

「別に見に行くぐらいいいと思うわよ？」

「…」

エンジンシティで行われるジムチャレンジ。俺の幼馴染は2人とも今日チャレンジする予定だ。

応援はしている。2人とも大切な幼馴染だ。出来ることならスタジアムで直接応援してやりたい。

けど…俺にはその資格が…

「…わかったわ。いきましょ。サルノリもお願いね」

—キイツ！

玄関から出ていく母を追おうとしたとき、スマホホトムに通知が入る。手に取って画面を開くとメッセージが2つ。

ホップ：シキ！今日やばいバトルするから未来のチャンピオンをよーく見とけよ！
ユウリ：今日カブさんとの試合なんだ。応援してくれたら嬉しいな！

思わず表情が緩む。

変わんねーなあいつら。

でも、ごめん。やっぱ応援は行けない。俺はどうしても自分が許せない。「行く」と返信するのは嘘になる。でも「行かない」と答える勇気もないので、

シキ：がんばれ

とだけ返信した。

「いこうサルノリ。今日はウールーたちの手入れだよな？」

—キ—

「バカ！ホップ！やけどケアしないと!!」

「あーもうユウリ！タイプ相性分かってないじゃん！」

「いつけええ！ラビフット！」

「おせえええ！ジメレオン！」

「はあ……シキったら、あの応援が彼らの力にならないわけないじゃない。」

違う部屋にいても聞こえてくるシキの声援。部屋で見ているものは確実に幼馴染2人のジムチャレンジの録画だろう。

カレーを頬張っている息子の相棒のサルノリに話しかける。

「ごめんねサルノリ。キミも戦いたかっただろうに……。」

—キイキ!

もちろんサルノリが何を言っているのかは分からない。しかし、サルノリの目を見て、シキの母は確かな信頼を感じ取った。

(でもぼくはシキを信じてるから!)

「ありがとね。たしかに、シキが本当に自分で思っているようなやつなら、ポケモンがこんなに懐くわけないもんね!」

(うん!ぼくはシキに選ばれて幸せだよ!)

母がシキがジムチャレンジをやめた理由に言及しない理由は単純だ。

信じているからだ。

自分も息子がまた、立ち上がる時が来ると。

シキ：おめでと。 かつこよかつたよ。
ホツプ：おう！
ユウリ：うん！

きのみ、求めます。

「え、カレーつくんの？俺が？明日？」

「そうなのよ。」

畑での作業の手伝いの後、母に告げられた事実。というか仕事？

ともかく、ハロンタウンにはたくさんウールがいて、もちろんそいつらにも食事を与えなければならぬのだが…。

明日というのは文字通りだ。今日の分はあるけど、それだけ。

「カレー用のきのみが底をついたのか？」

「そうそう！ブラツシータウンにきのみシヨップがあるじゃない？みんな偶然都合悪くて買い出し行けないのよ…。お願い！シキしくないのよ…！」

「んまあ、それぐらいならいいけどさ、シャワー浴びてからでいい？流石に汗流したい。」
「もちろん！あつ、領収書ちゃんと貰ってね！」

「いくぞー、サルノリー」

—キー!

シャワーを浴びて着替えてから、ブラッシーに向けて出発する。

俺の足から駆け上がり、頭の上にサルノリが乗ってくる。最初こそ重いーと思つてしたが、いまではこの重さが心地よくなつていた。

あんなことがあつたつーのに…。

ホント、ありがとうなサルノリ。

家とブラッシータウンはそこまで遠くないというか、めっちゃ近い。俺たち…つまり俺とホップ、ユウリの家はハロンとブラッシーの境目みたいなところにある。歩いてい分もしないで事実上はブラッシーにいるのだ。

さて、今回向かうきのみシヨップだが、売っているきのみの種類は少ないが、カレーには使いやすいものが大量に買えるため、よく利用している。

駅とポケセンの間にあるそこそこ急な坂を上るといつもと違う雰囲気のお店がいた。

「おっちゃんん。」

「ん？ああ、シキか。きのみか？」

「ん。いつものすけど…どうかしました？」

ああ…とバツの悪そうな顔をした店主は一度ため息をしてから話を切り出す。

「わりいな、シキ…在庫がなくてな…。」

「まじすか。トラブルですか？」

「ああ。ブラツシーとエンジン、電車で繋がってるだろ？いつもそーやってきのみ届けてもらってるんだが、野生のウールーが線路上でわんさか眠っててよ…今日は店開けそうにねえんだ。」

「あー、月に何回かありますね。りよーかいです。」

軽く別れの挨拶を交わしてからどうしようかと迷う。このままじゃウールーたちの飯がない。この辺で生えているきのみなる木を揺らしてもウールーたち全員に分け与えられる量にはならない。

「あー…どしよ」

—キイキ！

「ん？駅さしてどし…ああワイルドエリア」

ワイルドエリアに行くべし！とサルノリが伝えてくれる。たしかに、ワイルドエリアを自転車か何かでかつ飛ばせば数時間できのみを大量にゲット出来るだろう。

が、ここで問題がひとつ。

「でもよ。サルノリ…手持ちはもうお前しかないんだぞ。」

—キ—

「いや、お前もワイルドエリアのポケモンの強さは知ってるだろ。お前の負担が大きい。」

—…キイ…

「いや、気持ち嬉しいけどよ…」

—……キイ!!!

「痛つてえええええ?!おまつバチで脳天ぐりぐりすんなよ!!痛てえ!!」

「ああ、来ちまった。…どや顔するなサルノリ。」

「まだ痛い。こういうときはホントこいつ譲らないというか…『いじつぱり』というか…」

「…できる限り草むらは避けていく。いいな?サルノリ」

—キイ!

要は戦闘にならなきやいい。なったとしても最低限にして、バッグの中のピツピにんぎようを野生ポケモンの顔面にたたきつけてやればなおよし。

あつ、かわいそうだからホントはそんな事しないよ？

小一時間が過ぎた。きのみ回収は順調で、それほど危険なことにはなっていないかった。

「つて、（ゴゴ）エンジンシティの前か。流石に進みすぎたな…」

気がつくくとエンジンシティの門の前までやってきていた。よほど集中していたのか、まったく気づかなかった。

理由には心当たりしか無かった。

サルノリとの旅がまたできたみたいで…

—キイ？

横を歩いていたらサルノリと目が合う。いつもより楽しそうなのは、俺と同じ心境だからだろう。

わかっている。俺が心の底から旅を続けたいのは自分でもわかっている。ハロンタウンのみんなも簡単な仕事しか割り振らないのはいつでも抜けていいよという気遣いなのも気がついてる。

実際、いまのこの「買い出し」でさえかなり浮き足立ってしまった。知らないポケモンやテレビで見たポケモンとすれ違うだけで興奮した。

さつきやせいこのポケモンと戦闘になった。トレーナーとしての腕前はかなり鈍っていたけど、サルノリに指示を出して、サルノリがそれに応えてくれる当たり前のポケモンバトルに心踊った。

「なんでもねえよ」

なるべくこの高揚が表に出ないように答えて、サルノリの頭を撫でる。でもたぶん、サルノリも気づいている。なんてったって相棒…だしな。

「…サルノリちよつと寄ってくか？ 帰りは電車が動いていることに賭けてさ」

—キー！—

そして俺はパーカーのフードを深く被ってエンジンシティに入ってしまった。

エンジンシティに入るとすぐポケモンセンターがある。戦闘は最低限とはいえ、した。だからまずはサルノリを回復させることにした。

「ポケモンセンターへようこそ！ポケモンをあず…あつ。」

「えと、サルノリをお願いします。」

「えっ、は、はい！」

「…」

サルノリを回復させてからブティックやヘアサロンの通りの反対側にあるバトルカフェに入る。バトルカフェとは名の通りポケモンバトルができるカフェだ。1日1回挑戦することができて、勝つとスイーツをくれるという謎システム。

まあ、今日は普通にお茶するだけだが…。

「うまいか？サルノリ」

—キユキイ！

他にもこのカフェにはポケモンフーズが置いてあったり、トレーナーの行きつけの店によくなる。

「…なあ、あいつ」

「…え、流石に人違いじゃない？」

「…」

ご飯を食べてからカフェをあとにする。

すると向かいのブティックの中に見知った顔が見える。ユウリだ。あのカブさんとの熱い試合からまだ時間はそんなに経っていない。

ジムチャレンジは期間内にバッジを8個集めてシユートシティでエントリーすることでセミファイナルトーナメントへ進めるシステムになっている。俺が覚えている期限はまだずつと先。ヤローさんにまだ挑んでいないジムチャレンジャーもいるそうだ。

なら、俺もまだ間に合うのではないか。その疑問は当然だが。俺はダンデさんを通して正式に辞退させてもらった。集めたバッジはひとつだけだったが、バッジとダイヤモンドもダンデさんに渡した。

さて、ユウリに話を戻そう。いまも楽しそうに服を選んでいる。ん？というか、ひとりじゃない隣にいる女の子は…。

あつ、隣の子のポケモンだろうモルペコと目が合った。だれだっけなあの子。会ったときすんごいインパクトあったような…。

と、見つめ過ぎたのかモルペコのトレーナーは俺と目が合う。ユウリもその子の視線

をたどって俺に気づく。やばい。

…やっぱ合わせる顔、ねえよな。

そんなくっだらないプライドから、俺はユウリに背を向けて走り出した。

「ごめんな、サルノリ。急に走っちゃって。」

—…キイ!

謝るのはぼくにじゃない! って叱られているような気がする。

…そうだよな。ユウリに悪いことしちゃったな。はあ…っ。

「シっ…シキ!!」

「…追ってくんのかよ。ユウリ。」

振り切ったと思った人の声が後ろからした。俺ダツサイなあ。振り向くとユウリと一緒に買い物をしていた女の子まで一緒にいた。

「ユウリ、急に走ってどうしたの?…っってそのひと…」

「まっつてマリイ！シキは噂…は事実かもだけど！絶対悪い人なんかじゃない!!」

ああ、優しいなユウリ。マリイと呼ばれた女の子はいまも俺を睨みつけている。そりやそうだ俺評判はかなり悪い。ショッピングを一緒にする仲だ。友達…なのだろうその友達を守るための威嚇。話したことは、多分少ないけどマリイという子も、いい子なのだろう。

さて、ここはエンジンシティ。昼時で人はかなりいる。全世界に発信されるジムチャレンジ。その注目株のチャレンジャーが2人いるそれだけでも注目を集める。

それに加えて、俺もいる。

「——ねえ、あの人ってさ」

今日はかなり夢を見てしまった。もう一度サルノリと、あいつらと旅を、だなんて

「——ああ、あいつ…」

その声に現実に戻される。

俺は馬鹿だ。あんなことしといてまたポケモンと旅したいだなんて…。

「——厳選野郎だぜ。」

俺は、ポケモンのいる世界で、やっつてはならぬ事をした。

ポケモンいるとか、アガります。

走る。

走る。

「——うわでた。あの人トレーナーまだやってたの？」

「——でも悪気はなかったって話だよ？」

「——つつても予想出来たろ？あーなっちまうの。」

「——どの面下げてここ来てんだお前っ！」

「——まあ、悪気があるうがなかるうが…あれは…ね？」

うるさい。

うるさいけど

正しい。

「ま、まって！シキ!!」

ごめん。ユウリ。やっぱり無理だ。

「…っ…はあっ…ちつく…しよお…っ」

全力疾走をした後だ。息が上がっても仕方ない。いまがどこかなんて分からない。とりあえず適当な路地裏に逃げ込んだ。壁に背を預けて地面に座る。

別に誰も追いかけているわけじゃないのに、全力で何かを振り切るように逃げた。

サルノリはボールに入れて逃げた。

サルノリはああ見えて強いし、速いから俺がボールに入れなくても追いつけただろ

う。じゃあなんでボールに入れたのか。

「…サルノリ、出てきて。」

サルノリをボールから出す。すると、不安そうな顔が目に入る。心配してくれてるんだらう。

なぜサルノリをボールに入れたのか。いや、入れざるを得なかったのか。それはある1人のヤジの声を聞いて反射的にボールに入れたからだ。

『——てめえそのサルノリにも同じことすんじゃねえのか?!』

「…サルノリ。ごめんな…おれ、だっつきいトレーナーでさ。」

ようはサルノリにすぎがったのだ。俺だつて前はもつと手持ちがいた。けどケジメとして全員にがした。もちろんサルノリもにがした。

けど、このサルノリだけはハロンタウンまで歩いて帰ってきた。

「おれ…サルノリが相棒だって、言い返せばいいのにさ…ボールに入れて逃げてさ。」

…お前もホントは俺が嫌いなんじゃないかって、疑っちゃまった。」

—キ

サルノリはまるであやすように俺の頭を撫でてくれる。

ああ、ダツサイなあ。

「シキ。ガラルに引越すわよ！」

「はえ？」

そのシキという少年は最初何を言われているのか分からなかった。

自分は昨日たしかポケモン剣盾の凶鑑を完成させて、寝たんじゃなかったのか。というか俺一人暮らしだったよな？あれ？

混乱していたが話を続ける。

「あ、うん。ガラルつてどこの国？」

「ん？ガラル地方よ？」

「ん？」

「ん？」

母との会話が妙に噛み合わない。

ただそこにいる母は自分が正しく記憶している母親だし、自分の家も見慣れたものだ。

大きめなテレビに置時計。

ただ1点、妙な点があった。

「あれ？ポンは？」

飼っている犬が見当たらなかったのだ。ポンはシキが子供の頃から飼っていた、ヨークシャーテリアで、家族みんな「ぼんちゃん」と可愛がったものだ。

「ポん？」

「うん、ぼんちゃん。家族の。」

「…あなた顔洗ってきたら？」

「へ？おう、じゃあそうする」

風呂場も脱衣所も覚えている通りの造りで、何一つ不自由じゃなかった。

言われた通りにシャワーを浴びた後部屋に戻る。暇だからポケモンでもしようと、スイッチを起動して気づく。

「はっ。」

ないのだ。ポケモンが。ホーム画面に。

シキは焦った。

いままで育成と凶鑑の完成に費やした時間は？水の泡？ウォーターバブル??

よく分からないことを口走ったあと1度冷静になる。そうだ。何かの間違いで親がソフトを抜いてしまったのだろう。きっとそうだ。

確認するために、母に確認しに台所へ向かう。

「ねえ、母さ——」

「どうしたのシキ？暇ならのたまゴのせわしてあげて。」

シキは母の隣にあるポケモンのタマゴを見て、固まった。

シキがガラルに引越すころには、落ち着きを取り戻していた。

もともと北海：じやなくてシンオウ地方にいたシキ一家はガラル地方への引越しを決めた。

ならガブリアスつかつかカマル捕まえとかねえと!!おい母ちゃん!!モンボくれモンボ!!

などと口走っていたシキの思いは届かず、割とすぐガラル地方にやってきた。どのみちシキはフカマルをゲットすることは出来なかっただろう。手持ちが1匹もないのだから当たり前だ。

トレーナーにまだなれなかったシキはどうしたのか、もちろんテレビでやっていたのポケモンバトルにのめり込んだ。

「えええええ?!なにあのわざ?!合体技?!え、まって録画録画!!」

「あああああ!シロナさんのガブリアスかつこいいいいいい?!あああああ!」

「ええい!離せ母ちゃん!おれはカビゴンのお腹に飛び込んでくるんだ!!いますぐ!会場に!!」

時にはそこら辺を行くトレーナーに話しかけた。有名人もたまに居た。

「かつ、カツコいいすね!ゴウカザル!え、技見せてくれるんですか?!おおお!!」

「あなたはメリツサさん!!あついえ、テレビ見てるんで、あの…フワライドにつかまってるんですか…?」

「い、イーブイかわええええ!あつ、すいません。うるさいですよね。はい。」

とにかくポケモンのいる生活が楽しくて仕方なかった。

当たり前だろう、子供の頃にポケモンに触れたことのある人は必ずしも考えたことがあるだろう。ポケモンが本当にいたら!とか。

さて、シキがダンデからサルノリをもらって、旅立つ前までに気づいたことは大きく

1つ、ポケモンバトルはターン制じゃない。

んじや、「すばやさ」はゴミか？そうじゃない。事実、テレビでみたシロナのガブリアスはスピードで相手を圧倒していた。距離を詰める、離す、攻撃を避けたり、奇襲するのにもこのステータスは高い方がいいように見えた。

「あなをほる」して、飛び出し際にドラゴンダイブ叩き込むのなにあれ？攻撃のタイプなになるの？え？」

と混乱していたとの事。

2つ、母ヤバイやつ説。

あの日のタマゴは無事に孵った。

中身はリオルだった。

あらあら可愛いわね。とか言ってる母の横でお前何モンだよと本気でシキは混乱した。タマゴちよーだい、とも言っていた。

3つ、自分は英雄になれない。

ホップが同じ年で、これは?!とか舞い上がったこともあったが、家からまどろみの森が遠かった。ユウリの家が1番近かった。

ダンデにポケモンをもらった次の日、まどろみの森に入っていたのはあの2人だった。

「お、お前ら平気だったか?!」

「う、うんなんとかね」

「なんかすごい威厳あるポケモンがいたんだぞ!シキ!」

さて、ここまでシキがどうポケモン世界に馴染んだのかわかっていたただけかと思う。

なら、シキの失敗はなんだったのか。

シキはポケモンバトルの勝率が悪かった時期があった。タイプ相性は分かれど、わざを組み合わせたたりする発想力、ポケモンとの連携力が伸び悩んでいた。

「ちつくしよお。サルノリ、レドームシ。大丈夫か？」

—キ、キィ…

—レド…

ゲットしたサツチムシが、レドームシに進化していたとはいえ、ちゃんと2匹の力を引き出せていなかった。

ポケモン1匹捕まえるのだからって苦労した。ボールがあたらないあたらない。自分がノーコンなのではないかと自信を失うくらい捕まえられなかった。そりやそうだ。ポケモンだつて好きで捕まるものもいれば、捕まりたくないものもある。必死で逃げるだろう。

バトルだつて難しい。

自分のポケモンが何を覚えているか最初は凶鑑を見ないとわからないし、なんなら体

力も見えない。性格も分からないし、極めつけにレベルだって分からない。

相手もbotじゃない。ちゃんと考えて、対策している。

目があつたらボコボコにされるなんて、珍しくなかった。

さらにはシキにはプライドもあつた。

「もうクリアしてる」「相性覚えてる」

こういつた別世界で強くなった自信はあまり意味がない、だなんて頭では分かっていたのだろう。

しかしだ。

口には出さなかった。サルノリにも、ユウリにも、ホップにも、母にも言わなかった。

「ゲームだったら……」だなんて。

少しずつ、だが確実にシキの意識が変わっていった。

過去、振り返りませぬ。

「あつ、シキ。帰ったのね」

「ん。ただいま。」

「…何かあったの?」

「いや、平気。これ、きのみ。寝るわ。」

かなりぶつきらばうになってしまったことを少し後悔しながら、階段をあがって部屋へ戻ろうとしたら、母さんが腕を掴んできた。

「全然平気そうな顔してないわよ。」

「…寝れば治るから、大丈夫。明日はちゃんとカレー作るし。」

「…そう。」

「…ごめん。おやすみ。」

流石に態度悪かったかな…。でも今はごめん。すぐ布団に入りたい。階段を上るまえ、聞こえてきた母の声にさらに申し訳なくなる。

「シキ。泣いてる息子みて心配しない親はいないのよ。」

「あークソ！絶対あいつのポケモン個体値良い奴だ！」

それが、ポケモンバトルに負けた時の決まり文句になり始めていた。

言った後に正気に戻って後悔する。これが1セット。

シキ自身分かっていたのだろう。悪いのは確実に自分だと。

けど同時にそうではないと心のどこかで思った。だから自分のせいではないと口からでてしまう。

では、誰のせいかな。

「…いや、俺だ俺に決まってる

仲間のせいだなんて、二度と思うなよ。俺。」

「…もう朝か。ありがとサルノリ。」

—キィ!

いつものリズムミカルな衝撃で目が覚める。気づいているかもしれないが、俺は極力、サルノリをボールに入れない。

寂しさから来ている…訳では無いのだろうが、目の見えるところにいると落ち着く。これも裏を返せばサルノリを疑っていることになるのだろうか…。

「…絶対違う。違うぞ俺。」

自己暗示をかけて少しでも落ち着く。なぜサルノリを出してるか？お前が起きれないからだろうが！

…それもダサいな。

『サルノリにも同じことすんじやねえのか?!』

クソッ!

あのヤジの声が忘れられない。

けどもつと、ずっと最悪なのはあの光景だ。まぶたの裏にこびりついていて、目を閉じると思い出してしまう。

血。

血。

血。

たくさんのぼけもの——

——キイツ！キイイイ！

「…あつ…ど、どした？サルノリ。ああ、そうかカレー。」

カレーはガラルで今はやっている料理。まあぶっちゃけ俺は昔から食ってるし、なんなら人一倍、俺のカレーはハロインタウン内で評判がいい。

「へっ。すっげーうめえの作るからな。」

——キイ！

さんきゅ。サルノリ。

ちつとは違うこと考えられるかも。

「あつ、ユウリさん」

私はあの後シキを追いかけたが、見つけることがどうにも出来なかった。

いや、私自身少し見つけたくなかったというのもあるのだろう。

だって、どう声をかければいいのか、全く分からないんだもん。

私もホップも、シキを元気づけてあげたいと思ってる。でも彼がしてしまったことはトレーナーとしてやってはいけないことなのは間違いない。

「こんにちは。あの、どう？」

シキのポケモンたちは。」

ここは5番道路。預かり屋だ。

ポケモンのコンディションを整えてくれる、トレーナーのお供といっても過言ではない施設。

そして、ここはシキがもう、絶対に顔を出さない場所。

「うん。今日もいるよ。」

彼女は預かり屋の前に立っているお姉さんだ。

彼女の視線の先には預かり屋の壁を背にして、ここに帰らないかもしれない主、二元主のシキを待つポケモンたちがいた。

レドームシとリオルだ。

「…なんでシキのポケモンの面倒見ているの?」

「…ポケモンたちは悪くないもの。」

「シキのことは許しているの…?」

「…」

彼女は1度顔を伏せて、シキのポケモンたちに歩み寄る。2匹の前にフーズを置き、2匹の頭をそつと撫でた。

「私がおね、あの人の悪口を言うのと、決まってこの子達は怒るの。シキをバカにするな!つてね。」

預かり屋だから分かるの。彼がこの子達にどれだけ愛情を注いだのかとか、そういう

の。

だから人間としては、彼を許したいけど、

預かり屋という立場からは彼がやってしまったことは許せるものじゃないよ。」

「…だよ…ね。」

「このレドームシモリオルも、ずっと彼の帰りを待ってるの。ハロンタウンに行かないのは、場所が分からないから。」

多分、この子達は場所さえ分かれば彼の元に飛んでいくよ。」

「…分かったとしても、シキは…」

「そう。多分受け入れない。だからじっと待ってるの。彼を信じてずーっと待ってるの。」

そつと、私はリオルとレドームシの目を見て、確信する。この2匹は諦めていない。

もう一度シキと会えると、もう一度シキと旅ができると信じている。

目から闘志が消えていない。

なら、私も出来る限りのことをしよう。

「あの。」

「うん?」

「私、シキにあったとしてなんて声をかければいいのか分からないの。だから全部教え

て欲しい。

シキは私をいつだって助けてくれたの。次は私の番だから。教えて、彼はここで何をしたのか。全部！」

出会いは、まあ……最悪だったな。

近所に新しい家ができて、誰が越して来るんだろうって毎日のように考えていた。ホップともその話題で何度も盛り上がった。

だから「明日越してくるみたい」という母の言葉は私を期待させた。その「明日」の朝の事だった。

「おはよお。」

「早いじゃない。ユウリ。大きな欠伸ね。」

「誰が引越してくるのか気になって起きちゃった。」

「そう？ 私はもうその母親に会ったけど、いい人だったわよ。」

「ええー！ずるい！」

「ふふ、いいじゃない。後で家族で挨拶するって言ってたから。ユウリと同じぐらいの息子さんもいるみたいだったから、おめかししちやいなよ。」

「…寝癖は整える。」

「ふふ。はい。」

私だつて女の子だ。すこしぐらいは夢見たつていいだろう。

ホップ？ホップもかっこよく…無いわけじゃないけど…口を開けばアニキアニキ。いい人だけど、異性としては魅力を感じるかといえば…無くはない？程度。

この越してくる異性はどんな人なのだろう。私は気になつて仕方がなかった。

「…ゴンベ。私、可愛く見える？」

——ンベ

我ながらなんという質問をポケモンにするのか…。ちよつとした自己嫌悪に陥つた時だ。

ドアをノックする音が響く。

「ユウリ！来たみたいよ！ドア開けてもらつていい？今手が離せなくて！」

「あ、うん。行き、ゴンベ。」

私はゴンベを抱き抱えてドアを開けた。

「あつ、もしかしてユウリちゃん？可愛いわね！ほらシキ！挨拶する！」
「うう…：せめてカビゴンの抱き心地を…、いってえ！わあつたよ！…：こんちや、シキで…
す……………つ」

そのシキと呼ばれた男はさぞかし面倒くさそうな態度で自己紹介をした。
黒。

この男を一言で言い表すならそれがふさわしいと思う。髪と目の色、来ている服まで
ほぼ黒。黒いパーカーで、中のシャツはワインレッド。パンツは灰色のような色でシッ
クにまとまっていた。

…きゅ、及第点だな！悪くないけど！

まで。ちがう。

私も1度自分を落ち着かせてから自己紹介をしよう。

…なるべく好印象を与える感じで。

しかし彼の次の一言は時すら止める一言だった。

「抱かせてくれ!!!」
「はあああ?!?!?!」
「?!?!?!?!」

私の思考と、彼が彼の母親によってぶっ飛ばされた。

「すまん!まじすまん!あとありがとう!ゴンベを抱かせてくれて!!」

「あ、うん。あの、顔、平気?」

「正直くそ痛い。」

あの「抱かせてくれ発言」は「ゴンベを抱かせてくれ」という意味だったみたい。

それにこの人:シキの親。見事なストレートだった。息子を肅清するための豪快な右ストレート。ポケモンとわたり合えそうだった。

当のシキは痛むであろう頬を気にすることも無く、ゴンベを可愛がっていた。ゴンベも楽しそうだ。

：ちよつと今のポイント高いかも。

じゃない。落ち着け。まずは会話だ。

今この場には私とシキの2人のみだ。母親は2人とも台所で楽しそうに話している。どうやら馬が合うのか、昼ごはんと晩ごはんまで一緒にすることになっていた。

とにかく、シキと会話だ。

「えーと…ポケモン、好きなの？」

「まあ結構。つか、トレーナー目指してたりする。」

「ホント？私もなんだ！チャンピオンの試合で憧れちゃって…」

「ガラルチャンピオンって…ダンテさん？だっけ？」

「ダン『テ』さんだよ。動画あるよ！見る？」

「見る見る！シロナさんのバトルもすっげえからそっちも後で見せるよ！」

こんな具合でシキとの会話は尽きることがなかった。好きなポケモン。好きなポケモン、好きなわざ、好きなトレーナー、ジムリーダーなど、バトルに関する談議は終わることを知らなかった。

まあ、このシキという男はそれはそれは厄介だった。

「ちよつと！ダメだつて！！止まってシキ！まどろみの森は入っちゃダメなんだつて！！」

「うううう！離せ！！モフらなきやいけないポケモンがいるんだ！！」

「危ないから！！だいたいそのポケモンって誰？！」

「んぬううううう！ネタバレ禁止いいいい！！」

「なにいつてるの?!」

こう、すぐ暴走するのだ。なんというか、ポケモンを身近なものとして愛してるのじゃなくて、憧れみたいな感情を抱いている気がする。

けど、暴走するのはポケモンのことだけで、いつもはクールというか…ツンデレ？

「タイプ相性？いや、未来のライバルに教える気は………イメージで考えると覚えやすいぞ」

「おいホップ。落ち着け。リザードンポーズは分かったからよ……は？俺も？…嫌だつて………つたく、わかつたよ。」

くるくるくるどおーん！！」

「はあ？カレーの味付けが好み？…んじゃ次からこれにするよ。…んだよ2人でニヤニヤすんな。」

ホップとはテンションの差があつたけどホップ自身が誰とでも仲良く出来るやつだからシキともすぐに打ち解けていた。

だからこそ、あんなことが起きるとは思えなかった。

タマゴ、孵ります。

「行けっ！ヒバニー！ひのこだ！」

「無理をすんなサルノリ！距離とって被害を抑えろ！」

オレ、ホップはライバルが2人いる。

1人はユウリ、バトルセンスが抜群でこの前も負けてしまった。自分の手持ちを十二分に理解してて、正直カツコイイなってたまに思う。

もう1人はシキ！こいつはすごい！知識というか、教科書つうか！一緒にアニキの試合を見た時に、分かりやすく解説してくれるんだ。

オレたちは3人とも、アニキに推薦してもらってジムチャレンジに挑んだ。

「ヒバニー！逃がすな！でんこうせつか！」

「サルノリ！えだづきで迎え撃て！」

オレたちは見事にファイティングスタイルが違った。

オレはまあ、少し…というかかなり攻めに寄ってる。「ご、ゴリ推しで勝っちゃうのかよ…」とよくシキに驚かれる。

シキは防御というかカウンター狙いの動きが多い。地味だけど、決まった時の連撃は

こつちまで熱くなる。

ユウリはオールラウンダーというか、全部をこなせる。タイプ相性もすぐに覚えて、最近の戦闘は圧倒されてる。

いま思い出しているのは、シキとの初戦闘。

「そのまま押し勝て！ヒバニー！」

「やっぱそうくるよなあ！サルノリ、えだをぶん投げろ！」

ヒバニーの接近を予想してえだを前方に投げたサルノリ。進行方向に思わぬ攻撃を置かれたヒバニーは目をつぶってしまった。当然、枝はヒバニーに直撃。

「サルノリ！えだごと『はたけ』え！」

「ひ、ヒバニー！態勢を立て直せ！」

これも直撃。えだと共にヒバニーは吹っ飛ばされる。さらにサルノリが接近。ヒバニーは態勢を立て直す。

「…サルノリ！右から回れ！」

「…？一回距離をとるぞ！ヒバニー！サルノリから離れ…ッ！ヒバニー！足元！」

サルノリは右から回る。そこから離れる指示を出したから当然、ヒバニーは身体をサ

ルノリに向けて下がる。

そして、足元に転がっていたサルノリのえだに足を取られる。

「！しまっ」

「はたけえ！サルノリ！」

サルノリの全体重を乗せた「はたく」が炸裂。

こうしてタイプ相性を覆してシキは初戦闘でオレに勝利した。「身内読みだけどな
…」つてシキは言っていたが、それも才能だとオレは思った。

もうひとつ思ったのは、絶対にリベンジするってこと。

けど、その思いは、いまだに果たせていなかった。

「…そうか、シキ、思ったより追い込まれてたんだな。」

『うん。私が預かり屋さんから聞いたのは、これで全部。』

突然ユウリから電話があった。オレたち、もちろんシキを含めて、はライバルだ。旅

に出てからは連絡も取り合うことは減ったし、シキがジムチャレンジを諦めたことを知ったのはsnsなどでシキがバツシングされ始めたあとからだ。

もっと早く気づいたからって何ができた訳でもないけど、友人として寄り添うぐらいはできた。

この感情はもちろんユウリだって覚えているはずだ。

「でもお前もお前だぞユウリ！ 話聞くならオレにも声かけろ！」

『ご、ごめんね。実はシキと会ったんだけど、じつといられなくて…』

「…まあ、すぐ行動しなかったオレも悪いけどよ。」

『それは…私も同じ。』

今すぐシキに会いに行つて元気づけたい。当然だ。ライバルだし、友達だ。張り合えないし、元気でいて欲しい。

けど、ユウリの話を聞いて、余計なんて声をかければいいのか分からなくなった。

「…なあユウリ、なんて声かければいいのか、分からないぞ。」

『…うん。』

シキのせいでポケモンがたくさん死んじやったのは、変えられない……。』

「レイド穴はもう二度と行かん。」

シキは運が良すぎた。

入るレイド穴はいつだって難易度が高く、サルノリとレドームシでは太刀打ち出来なかった。

サポートトレーナーよりも弱い状態と言っても、間違いではない。

シキは運が悪すぎた。

毎度毎度、穴から嵐で追い出される度に、後頭部を、膝を、とにかく痛いところを何度もうちつけてワイルドエリアに戻る。

サポートトレーナーはダイマックスバンドを持たないからダイマックスできない。

ならダイヤモンドにするのはシキのポケモンだ。

そして何よりもきついのがダイヤモンドポケモンの猛攻だ。この世界では、ターン制の戦闘はない。

しかも巢だ。家だ。当然ポケモンも全力で抵抗する。追い込まれてから攻撃の激しさが増す？否、常にフルスロットルだ。

全体攻撃連発、容赦のないダイヤモンドス技、天候やフィールドの操作。

拳句の果てには上手く決まらないはずの「だいはくはつ」で共倒れ（シキも倒れる）。勝てない。勝てないからダイヤモンドスアメも取れない。ポケモンが少ないから対策もしにくい。

こうして、シキはレイドから高個体値のポケモンを捕獲するという行為を諦めた。「…今日は帰る。レドームシ、明後日はヤローさんとの試合だからな。頑張ろうぜ。」

シキは母親から貰ったタマゴを撫でながら言った。

言ってしまうえば、それは奇跡というものだった。

タマゴというものは、100%ではないが、双子なんて生まれない。

生卵を割った時、卵黄が2つあることは珍しくないが、孵化するとなると話は別だ。

胎児が体内で養分を貰って育っていく人間や他の動物とは違って、母親から栄養を貰えないのがタマゴだ。

卵黄が2つあろうが、子供の栄養となるものは1匹分しか卵の中には存在しない。そのため栄養の取り合いとなり、結果産まれてくるのは1匹になる。2匹奇跡的に生まれただとしても、奇形だったり、すぐ死んでしまう。

だが、目の前で孵ったタマゴからはリオルが2匹現れた。

だからこそ、シキは目の前の光景をみて、口を開けたまま固まっていた。

「……え……う……」

感動、喜び、驚愕。胸の中で渦巻く感情をどうにか言葉にしようとしたが、声も出ない。

固まってしまっているシキを正気に戻したのは、サルノリだ。

—キイ!!

「へ? あつ…: そうだ! も、毛布とか出さねえと!!」

トレーナーとなる上で、知っておかなければならないのが卵から孵ったポケモンの世話の手順だ。ある程度育ってから孵化するものなので、特別なことはしなくていいのだが、体温を落とさないことと、守ってあげるとは言わずもがな、理解出来ることだろう。

すぐ戦闘に出せるほど育てていないので、やはり世話をするのが第一になる。

あたふたしながらシキはリオルたちの世話をする。その時に気づいた事だが、オスとメスが1匹ずつ生まれていた。何をすべきなのか自分で考えたあとも、何か足りていないのではないか、心配になり、ホップとユウリにも連絡をとった。

ひと段落する。

今ではリオルたちはゆっくり眠っていて、シキはカレーを作っている最中だ。サルノリとレドームシはリオルたちの様子を見て、何かあつたらシキを呼ぶ。我ながら完璧な布陣だとシキは得意げになっていた。

「リオルたちもカレーなのか…? いや、ミルクのがいいか?」

よく分からないので、とりあえず両方用意したシキ。サルノリとレドームシにカレーを食べてもらって、その間はシキはリオル達のそばにいる。

「…かわいいかよ。」

シキはなんてことなく、その頭を撫でた。

「ここで、奇跡が起きる。」

「…っ」

なぜだ。サルノリやレドームシの頭を撫でた時はこんなの出なかった。

シキは困惑した。

転生特典。なんて言う言葉をご存知だろうか。これは一種の「それ」なのかもしれない。

故に、これを奇跡と捉えるのか、はたまた運命と捉えるのか…

リオル ♂

H まあまあ

A ダメかも

B さいこう

C すごくいい

D さいこう

S まあまあ

リオル ♀

H ダメかも

A さいこう

B まあまあ

C すごい

D まあまあ

S まあまあ

『これ』が見えるようになって、彼は「プレイヤー」になっていく…。

ジム戦、燃えます。

孵ったばかりのポケモンの頭に触れるとそのポケモンのゲーム基準の個体値が見える。

孵化後、一日経過すると見ることはできない。

シキが得た「奇跡」は言ってしまうえばそれだけの事。

しかしこの個体値を理解しているか否かでバトルの勝敗が大きく変わるのと言わずもがな、「プレイヤー」の多くが知っているだろう。

だからこそシキはリオルたちの個体値が目の前に浮かび上がった時

微妙…

と、そう感じてしまった。

「つーいやひとつの命だろうが！何考えてんだ！」

と、度々己に喝を入れる。

いったいなぜ、シキはこの段階で厳選という行為をしないのか、

それは「すごいとつくくん」の存在である。

きん、もしくはは ぎんのおうかん と引き換えにポケモンの個体値を「さいこう」まで上げるシステムのことだ。

裏を返せば、これは訓練次第で個体値をあげられるということ、厳選する必要が無いということになる。それはもはや努力値では…？という疑問は最もではあるが…

これが、この事実がシキの心の支えになっていた。

旅をしていけば自ずと個体値、つまりポケモンが強くなつていくのではないか。予想でしかないが、ゲームとは違いすぎるこの世界ならありえない話じゃあない。

なら愛を持ってポケモンに接しよう！この世界にきて、まずシキが考えたことだ。

さて、話を変えよう。

なつき進化はご存知だろうか。

なつき度を十分に上げてレベルを上げること、進化する特定のポケモンの進化の総称だ。そして、この特定のポケモンに「リオル」が含まれる。

はもんポケモンであるリオルは自然の様子だけでなく、人の感情を「はどう」という波で感じ取ることが出来るポケモンだ。

生まれたばかりの2匹は感じた。シキの葛藤を。愛を。

それがどういいう経緯でシキを苦しめているのかはまだ感じ取れない。

けど、それらが自分に向けられているのはどこか分かっていた。なにかを抱えながらも真摯に自分たちのことをお世話するシキに懐かないことなんて、あるわけが無い。

あとカレー美味しい。

ともかく、シキのリオルたちの進化はすぐだった。

「だ、大丈夫か！サルノリ！」

ゲームのようにヤローを倒すことは簡単じゃなかった。

まず、ジムチャレンジだ。ほんとに疲れる。最初のジムだからチャレンジを難しくしているとは言っているものの、ゲームでは大したこと無かったというのがシキの記憶

だ。

現実にはほんとに辛かった。

「イヌヌワン！こっちくんな!!まって!おねがいあああああ!!?!」

イヌヌワン、もといワンパチが一生決まったルートをぐるぐる回すわけでもなく、むしろ向かってくる。ウールーが散り散りになってしまふ。ワンパチに振り回されていながらも、文句はあんまりなかった。彼は犬派だ。

それはともかく

とにかくチャレンジで体力をこつそり持つていかれている、ということ、ジムリーダーとの勝負でポテンシャルをフルに発揮することは難しかったのだ。

加えてスタジアムの歓声。緊張しないわけが無い。

ようするにシキはガツチガチだったのだ。

「くっ！すまんサルノリ！俺が対応できてなかった!!」

そして大きな理由がもうひとつ。

ダイマックスの存在だ。シキもできるからイーブンだが、「ダイマックスは3ターンの間」という制約なんてない世界だ。技を3つ、かいくぐれば大丈夫!と言うことではなく、ダイマックスが解けていなければダイマックス技を連発できるという鬼畜の時間だ。

「うん。ぼくの手持ちはたった2匹とはいえ、ワタシラガはひと味違うんだな。」
「そうみたいっすね…」

ヒメンカとワタシラガ。ジム戦におけるヤローの手持ちだが、ここはゲームと変わらなかった。

そして、シキはサルノリ、レドームシ、そしてリオル2匹だ。レドームシであれば虫技でこうかばつぐんを付けるとはいえ、ポケモンバトルの経験の差が忠実に出ていた。

レドームシをだす、ヒメンカをなんとか突破。ダイマックスしたワタシラガに翻弄され戦闘不能。続けてサルノリを出すダイマックスが切れることなくまた撃沈。

いまの状況だ。サルノリをダイマックスしようとしたが、それよりも早く力尽きてしまった。

相手は待つてくれないということを散々味わったはずなのに、ここに来てまたシキはゲームとの違いに苦しめられる。

「…っ！頼むぞ！リオル！」

——オルツ！

リオルを繰り出すのが、シキのリオルは生まれたばかり。レベルが少し上がっているとはいえ、ワタシラガに太刀打ちできない。

「ははは！農業は粘り越しじゃと言った！ダイソウゲンだ！ワタシラガ！」

「くっ！リオル！ダイマックスするぞ！」

——オオルツ！

慌ててダイマックス。結果的に吉と出た苦し紛れの一手。ダイソウゲンを受け、リオルはまだ立つことが出来ていた。

「いいぞ！リオルツ！こっちもねばんぞ！ダイウオール!!」

「やるね！そのままダイソウゲンで圧をかけるよ!!」

ダイウオールでワタシラガの攻撃を受け止めているとはいえ、完全にダメージを無効にはできない。

「まもる」などのわざもまた、すこし扱いが違った。技を無効化するのではなく、ダメージをできる限り減らす技になっていた。

例えばダイナツクルがダイウオールに防がれたとしても、ダメージを減らしているだけなので、きちんと追加効果のこうげきの上昇はされる。

「いいぞ！ワタシラガ！押し切れ!!」

「…ま、負けないでくれ！リオルツ!!」

こうなつては祈るしかない。リオルがダイウオールでダイソウゲンを受け止めきり、ワタシラガのダイマックスが切れることを。

観客の大勢がこの攻撃が防がれるか、この壁が貫かれるのか、ここで試合が決まると

会場の全員が理解していた。

——ラガアアアアア!!!

——リ…ッ、オルツ!!!

リオル的には、困惑しかなかった。この前タマゴから躰ったばかりだ。なのにこんなスタジアムに出されて巨大化させられて…。

「頼む!!リオル!!!」

ただ、自分の世話をしてくれた人にただ答えようと、必死に行動していた。

そして、シキとリオルはジムチャレンジの歴史に残る瞬間を残すことになる。

進化だ。

ここで、ダイマックス中に、リオルがシキの声に答えるように。

リオルがルカリオに進化した。

さて、このダイマックス中にリオルがルカリオに進化し、ヤローに勝利するというド派手なシーンが、ガラル地方で大きな注目を浴びた。

おかげでシキは一躍有名人になる。

そう、注目を浴びに浴びた。

浴びすぎたのだ。

「ヤローさん。」

「…？ああ、ユウリさんとホップさんじゃあないですか。どうしました？」

「いや、あの、その」

私とホップはエンジンシティからナツクルシティに旅立つ前にターフタウンへ戻り、ヤローに会うことにした。

もちろん、シキの事だ。

ヤローというジムリーダーは、シキの炎上を収めるのに率先して協力したジムリーダーだ。シキと唯一戦ったジムリーダーというのも大きな理由の一つだろう。

「シキのことで来たんだ」

言い淀んでしまった私の代わりに答えてくれたホップ。

「…ああ、彼ね。彼がどうしたの？」

「あの、どうして、シキを庇ったんですか、彼の行いを庇うことは…その…」

「あ、そのことですか。まあ、ジムリーダーとしての評価はちよつと落ちましたねー」

「それだ！なんでシキを庇ったんだよ！なにか知ってるのか？」

「いやあ、そうじゃなくてですね。彼があんなことをするだなんて、やっぱり理由があったのか、仕方なかったことのどっちかじゃあないのかってね。」

ヤローさんはさも当然のように言う。

「や、自分の立場も考えたよ？でもねえ…」

「…どうしたんだよ？」

「彼とのバトルが楽しくてね。またやりたくなって思ったし。」

「し？」

「まだ、あるんですか？」

ヤローの言ってることは理解出来る。なにせ、シキとずっと一緒にいた私とホップと同じだからだ。

シキがそんなことしたのなら、理由がある。

世間はストレスだとか、もともとそういう気質があったんじゃないかとか言ってるけど。彼がポケモンにそんなことするわけ無いんだ。

すくなくとも、私たちはそう思ってる。

「いやね、あの人に言われたら協力しなくちゃね」

「協力？」

「協力をお願いした人がいるんですか?!」

過剰に私は反応してしまう。だってそれは何が起きたのか確実に知っている人がいるってことだから。

「誰なんですか!!」

「え?ぼくよりも君たちの方が繋がりある人なんじゃないかな?」

「え?」

「現チャンピオンのダンデさんが彼を助けるために、もう一度ジムチャレンジに参加させるために動いてるみたいだよ」